

大型機械によるヒエの栽培法

甲斐光夫・増田治策・高木文男・芝 宏道

(九州農業試験場)

大型機械を利用して乾草生産を行うと、シコクヒエ、スキヒエともほとんど再生しないので、簡単な追播栽培方式で年間2回の収穫を行う栽培技術について試験を行ったので報告する。

試験方法

1. 供試品種：シコクヒエ(祖谷在来)およびスキヒエ
2. 播種期：6月3日(第1回) 8月2日(追播)
3. 播種様式：条間10cmドリル播き 2kg/10a
4. 施肥量：N：12, P：12, K：10kg/10a

試験結果および考察

1. 2回播き時の土壌硬度

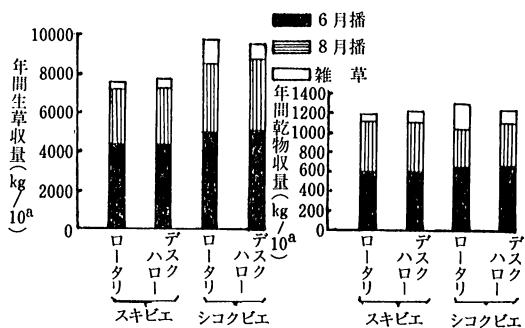
1回目収穫後の土壌硬度は、第1図に示すように乾草調製前と比較して、調製後は地表～地下10cm層が特に硬くなり、ツースハローでは、スパイクの条がかすかにつく程度で、追播きしても発芽は不良である。したがって、ロータリで浅耕するか、デスクハローで2回掛けしなければ正常な発芽は望めない。

なお、は種後鎮圧は、乾草生産時の土砂混入低下に役立つものであるから必要である。

2. 乾燥経過

フォレージハーベスタ刈りでの乾燥経過は、日射量の多い7月の刈取りでは両品種間に大差がないが、日射量の少なくなる10月の刈取りでは第2図に示すように、シコクヒエの乾燥が遅い。これは茎が太い上に、生草収量も多く、切断長が長く、初期含水率が高いためと考えられる。

が、後期にはシコクヒエが良好となる。年間総生草重を第3図に示した。ロータリ耕とデスクハロー耕では大差なく、スキヒエが7215kg/10a、シコクヒエが8270kg/10aで、シコクヒエが多収であるが、乾物収量では第4図のとおり、乾物率の高いスキヒエが1142kg/10aと多い。



第3図 年間生草収量

第4図 年間乾物収量

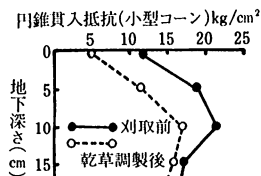
4. 作業能率

第1表に示すとおり、6月播きは収穫までの延労働時間が29時間であったが、8月播きは簡易耕としたため24時間で、2回収穫合計は53時間となり、極めて栽培容易な粗飼料生産方式である。

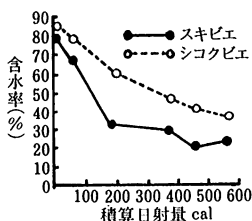
第1表 作業能率

項目	作業月日 (月日)	供試機	延労働時間 (hr/ha)	比率 (%)
耕起	5.31	16吋×2連	3.0	10.5
施肥	6.3	ブロードキャスト	3.2	11.2
整地	6.3	デスクハロー	2.0	7.0
均平	6.3	ツースハロー	0.6	2.1
播種鎮圧	6.3	バックシーダ	4.0	14.0
刈取	7.27	フォレージハーベスタ	5.3	18.5
転草(4回)	7.27~28	チエン式テツダ	7.2	25.2
集草	7.28	チエン式テツダ	1.5	5.2
梱包	7.28	ヘイベーラ	1.8	6.3
小計			28.6	100
8月播小計			24.4	
総合計			53.0	

注：8月播は簡易耕



第1図 乾草調製前後の土壌硬度



第2図 乾燥経過(10月11日刈取)

3. 生育と収量

6月播き、8月播きとも、初期生育はスキヒエが良い